

【実践報告】

地域産業に根ざした就労継続支援の提案

伝統文化，企業，そして人をつなぐ

白村 直也¹⁾，後藤 千絵²⁾，堀 絵美²⁾

¹⁾ 岐阜大学教育推進・学生支援機構

²⁾ 一般社団法人サステイナブル・サポート

要旨

2019年度後期「課題解決型インターンシップ」を，岐阜市の一般社団法人サステイナブル・サポートが運営する就労継続支援 B 型事業所「アリー」にて執り行った。そこに普段通所し，職業訓練を受ける方のために自分たちに何ができるかを授業で検討した。学生たちは，岐阜の特産である和紙を活用した商品開発を着想し，通所する皆さんが製作しやすいような仕組み作りに取り組んだ。「アリー」に通所する方の職業訓練のあり方を学生は学び，その成果を踏まえて自分たちのアイデアを提案した。本報告はその実践報告である。

キーワード：プロジェクト型インターンシップ，就労継続支援，地域産業，職業訓練

1. はじめに—岐阜大学「プロジェクト型インターンシッププログラム」とは

「岐阜大学プロジェクト型インターンシッププログラム」とは，文部科学省の産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業「中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化」により，2012年度に岐阜大学が採択された教育プログラムである。

2013年度は約半年間，パイロットスタディとして PBL 型（Project-Based Learning，チームで課題を解決する）の教育プログラムを実施し，2014年度からは新たに全学共通教育でのキャリア形成科目「プロジェクト型インターンシップ」として単位認定され，毎年実施されている半期の授業（後期 15 回）である。今年度，本授業は表 1 のような授業概要と到達目標をもって 2019 年 10 月より開始した。

表 1. 「プロジェクト型インターンシップ」の授業概要と到達目標

授業概要	本講義では，岐阜県で障害者の就労移行支援に取り組む事業所から課題の提示を受けて，グループで解決策を検討し，実際に提案を実施します。提案のためには，フィール
------	---

	ドワークや文献調査，そしてインターネットでの情報収集も必要となるでしょう。そうしたものを踏まえて，学生1人1人が課題の解決に資する意見やアイデアを出し合い，ディスカッションを繰り返す中で，学生ならではのアイデアを丁寧に練り上げていきます。そのアイデアを事業所担当者の前でプレゼンさせてもらい，直接にコメントを頂く機会を設けます。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・態度としての主体性，チームワーク力，情報の収集・発信力，謙虚に受容する力を育むことができる ・スキルとしての考える力を育み，グループ内で共有することができる ・グループ内での役割分担を通じてパフォーマンスを上げるには個人としてどのようにすればよいか見出すことができる ・社会人として活躍するために，現在の自分に足りないものに気づくことができ，他者に説明することができる ・自分に足りないものを，今後の学生生活でいかに身につけていけばよいか見出すことができ，他者に説明することができる

「インターンシップ」と銘打ってはいるが，このプログラムはインターンシップ先への継続的な通いを原則とせず，おおよそ後期の授業時間を利用して3～5日間程度，行政機関や民間企業での研修に従事するものである。その過程で，受け入れ先の行政機関や企業より与えられた「課題」の解決に向けたグループワークを実施する。年明け1～2月に受け入れ先のご担当様のもとで成果発表会を実施し，課題に対する具体的提案を行うというのがこのプロジェクト型インターンシッププログラムである。

2019年度は，昨年に引き続き就労移行支援事業所¹「ノックス岐阜」の運営を軸に，岐阜県岐阜市において福祉事業を展開する一般社団法人サステイナブル・サポートが運営する，就労継続支援B型事業所「アリー」（岐阜県岐阜市玉井町36番地1）に学生の受け入れをお願いした。当法人は就労に限らず，地域における障害者が抱える課題に対し非営利団体として課題解決のアプローチを実践している²。

2. 就労継続支援B型事業所「アリー」とは

まず，就労継続支援B型事業所「アリー」（以下，「アリー」）とはどういうところなのか。「アリー」のホームページ [<https://alley-ss.com/use/>] をもとに紹介したい。「アリー」は，次のような女性を主な対象に，就労訓練を提供する就労継続支援B型事業所³である（図1，2）。

- ・発達障害，精神障害のある方で，将来的に一般就労を目指す方
- ・働きたい気持ちはあるけれど，就労移行支援事業所などを利用して一般企業等の雇用に結びつかない方や，就労経験はあるけれど現在は体調等が整わず一般企業で働くことが

困難な方

- ・細かい手作業や小物づくり，女性向け媒体のライター業務等の興味・適性のある方

提供される就労訓練 [サービス内容] は、「コツコツおこなう作業，スキルを活かした業務，人や地域とのワクワクしたつながり。一人ひとりの興味や特性に応じた作業を提供します」と記されている。具体的には、「アリーでは，和傘や和紙クラフトなど，岐阜の文化や観光に携わる作業を中心に行います。また，将来的に一般就労を目指す方のために，PCを使用したデータ入力やライター業務なども行う予定です。思うように働けなくても，地域の文化や産業を担うやりがいのある仕事に，自分のペースで少しずつ関わることができます」と記されている。就労訓練を受ける利用者は，「アリー」に週2日以上通う。10時から12時，13時から15時の作業，そして15時から16時の面談などを通じて一般就労を目指している。



図1. 「アリー」正面風景(ホームページより)



図2. 訓練室

3. 授業風景

今回この授業を履修した学生は，全員1年生であった。学部も様々で教育学部2名，工学部4名，地域科学部1名，そして応用生物学部2名の計9名であった。履修者数が確定次第，「アリー」の担当，堀と授業の進め方などの打ち合わせをし，10月1日(火)の初回を迎えた。「アリー」で学ぶ利用者の方は，就労訓練を受けている。そのため，授業では利用者の方の就労訓練に資するような，手作業でゆっくり取り組めるような商品を考えることになった。

授業が始まった10月に後藤(一般社団法人サステイナブル・サポート代表理事)が来学，日本の障害者が置かれた状況，とりわけ就労状況について話をした。学生にとっても普段の生活では馴染みのない話であったようだ。これから授業に取り組むにあたって背筋が伸びる思いであったと思う。また，極力早く現場を見学したいということもあり，学生のスケジ

ルールを調整し、実際に就労移行支援事務所のノックス岐阜（岐阜市）への訪問を行った。初回（2019年10月16日）をのぞき、履修学生全員が会う日程の調整はできず、結果として複数回に分けての訪問となった。初回訪問時の感想を、ある学生は次のように振り返った。

（2019年10月16日）9人全員でアリーに行き、学外に初めて訪問をした。

後藤さんと堀さんに同席していただき、アリー施設の説明や、実際にこれから入る利用者さんたちにやってもらおうと考えている作業を伺った。アリーの方々も、自ら企業さんなどの作業場に出向き、どのような作業を委託してもらえるのかを検討しているとのことだった。岐阜和傘や岐阜提灯など、岐阜の名産品に注目した作業を利用者さんたちにやってもらいたいとおっしゃっていた。すべての工程を行うのではなく一部をアリーさんで請け負うことによって、利用者さんに伝統ある工芸品の制作に携わってもらい、岐阜についてさらに知られる・好きになれるきっかけになればいいとおっしゃっていた。また、これらの工芸品は現在、後継者が非常に少ない状態であると伺った。岐阜独特の作り方・伝統を継承していくためにも、このような作業をする意味があると私自身も思えた。（以下、略）

この訪問後、9名の学生は3人ずつのグループに分かれ、商品の考案に取り組んでいった。どのグループも、岐阜の名産美濃和紙に着目し、極力生産の工程が少なく、またコストが抑えられるものにしようという点は共通していた。3つのグループからは①和紙を折りマグネットなどをつけて作るカードケース、②和紙を折り竹ひごやつまようじにつけてインテリアとする和傘シェード、そして③和紙を用いた、イヤリング・ピアスなどのアクセサリーの3案が出され、投票の結果、③和紙を用いたアクセサリーの開発の案を、学生全員でブラッシュアップしていくこととなった。アクセサリーといえども、種類は豊富だ。学生同士で話し合いをした結果、和紙に加えてレジン塗装し、UVライトで固める（図3）ことで



図3. UVライトをあてる作業



図4. 熱気を帯びる学生の話合い

長く利用してもらえる商品にしようということになった。製作方法は、①モールド（シリコン型）に和紙とレジンを入れ、固める方法、②枠のある金属の板に和紙を置き、レジンを通して固める方法、③和紙で折り紙を折り、レジンを上から塗って固める方法で試作を繰り返した（図4）。その成果を11月27日スケジュールの合う学生5名で「アリー」を訪問し、プレゼンを行った。そこで頂いたコメント（コストはもとより、レジンで固めると和紙らしさが失われてしまう、また先行商品との差別化の問題など）を持ち帰り、再度授業の中で再検討。商品を製作するにしろ、どこでどのように販売するのか、誰をターゲットにして販売方法を構築するのかなど、問題は山積みであった。なにより、「アリーに通所される方が取り組めるような極力負担のない」（利用者の方への工賃に見合う作業量・材料費）商品の開発という当初の目的を再確認することとなった。

その過程で、学生からピアスやイヤリングなどの案が出され、試行錯誤しながら試作品を作成していった。ピアスやイヤリングの耳につける部分や、和紙で折った鶴などにつける金属のパーツは、自分たちで岐阜県内の企業を調べ、数店候補を見つけたが、製造されているものを見つけるのは難しいという壁に直面してしまう。そこで「アリー」より、学生は岐阜市で提灯を製作している浅野商店の紹介を受け、2020年1月14日に学生3名が訪問。また翌日には和傘製作を行うマルト藤沢（岐阜市）も訪問した。目的は廃棄される予定の和紙や関連材料を譲り受けることである（図5）。

両訪問先で自分たちの取り組みを紹介し、より和紙の良さを打ち出す商品として、また「アリー」に通所する方の作業の負担にならない商品として、「モビール」（和紙にデンプンのりか木工用ボンド3倍希釈をつけ、枠（針金、竹ひご、水引など）に貼り針と糸でつなぐ）の案を頂いた。また、モビールと同様に、枠にイヤリング和紙を貼る、連結する糸の色をカラフルにさせるなど、モビールを応用したイヤリングとピアスの製作についても検討することとした。このような話し合いと取り組みを通じて、2020年2月14日、「アリー」を訪問し自分たちの取り組みの成果と商品（最終的には美濃和紙を使用したモビール：図6）の提案を行った（図7）。モビールの製作については「アリーの利用者さんたちが、この美

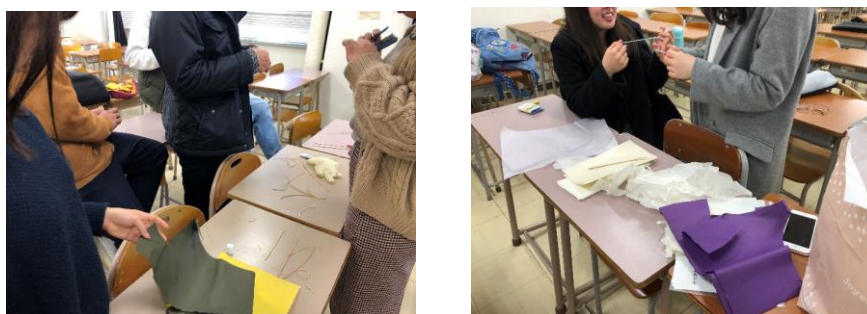


図5. 浅野商店、マルト藤沢から頂いた資材を使った試作品作り



図 6. 作成した試作品（左：綿を入れ和紙を糸で縫った小物，右：モビール）

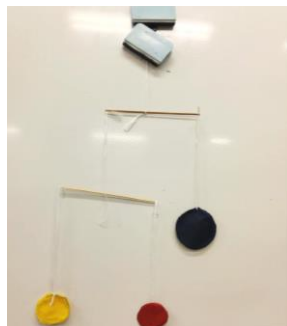


図 7. 最終プレゼン風景
於：「アリー」

濃和紙を使った商品を作ることで、美濃和紙への興味・誇り、そして達成感を感じてほしい」という学生の思いが込められている。

2019年10月から始まったこの授業の流れと、自分たちの中でどのような話し合いがなされ、一つ一つの問題にどのように向き合ってきたのかを、学生たちはスライドを使用しながら丁寧に説明していった。最終発表を聞いた後藤と堀がその後コメントをし、この半期の総評をした。モビールというアイデアについては、後藤は「利用者さんたちのことを第一に考えてくれて嬉しい」と述べ、学生の今までの活動を評価した。また、今回の学生のアイデアを「アリー」での職号訓練のあり方に活かせるよう検討していきたい旨のコメ



図 8. 最終プレゼン資料 ①



図 9. 最終プレゼン資料 ②

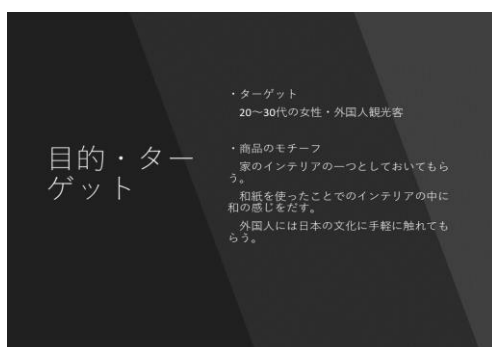


図 10. 最終プレゼン資料 ③



図 11. 最終プレゼン資料 ④

ントを述べた。図として、最終プレゼンの資料の中から4枚（図8から図11）を挙げておきたい。

4. 2019年度インターンシップを終えて

今回のインターンシップを振り返って、学生を受け入れた側として共著者後藤、堀の2名で振り返ってみたい。

今年度のインターンシップは、一般社団法人サステイナブル・サポートが昨年10月1日に開所したばかりの、就労継続支援B型事業所「アリー」で受け入れることとなった。通算3回目となる今回のインターンシップでは、「アリー」の利用者が作成するオリジナル商品の提案を課題として学生に投げかけた。「アリー」では、岐阜提灯などの伝統産業に関わる作業を行っていたが、利用者が増えるにつれて作業を増やす必要があり、また自社ブランドで販売ができれば工賃向上も期待できるため、商品開発の必要に迫られていた。「アリー」に通う利用者が興味を持って取り組めそうなこと、手先の器用さなどの特性等を考慮しつつ、商品として販売するためにはカスタマーの設定から販売価格帯、販路、原価率、仕入先など、多角的に検討をしなければならない。

さて、インターンシップと聞くと、会社に来て与えられた業務を執行するイメージが強いのだろう。商品企画という、具体的な指示のない状況に学生の間では戸惑いも見られた。「何をすればいいのかわからない」「自分たちにできるのだろうか」と、不安もあったと思う。学業などと違い、正解のない問いに対する活動は達成感も得にくく、苦しかったのではないかと思う。

このような手探りの状況で商品を考えていく中、学生に「こういう作業ならできるけど、これは難しい」などアドバイスをした。そうすると、学生から「これは利用者にはできるのか」、「どこまでならできるのか」、「どうやったらできるのか」という質問が出てきた。一般の人が考える「できる」が利用者には困難であること、「なんでできないの？」ではなく、「どうやったら、どのようなことならできるか」を考え、自分のペースでゆっくり取り組めることが利用者にとって大切であることを、学生は感じてくれたのではないか。

紆余曲折を経て学生たちは、なんとか最終プレゼンにまで到達してくれた。学生たちからは「インターンシップに参加して学ぶことが多かった」という感想をきくことができ、受け入れた私たちとしてもホッとしている。なお、モバイルのアイデアや制作方法は応用の可能性が感じられ、学生が提案したアイデアをブラッシュアップして、今後「アリー」において商品のラインアップに加えていきたいと考えている。

「アリー」の思いの中に、地域と福祉の連携がある。岐阜の伝統的な地場産業と、地元の岐阜大学の学生とが協力し、地域に貢献できることは理想である。今回、学生に出した課題は、あくまでも提案までであり、それを頂いた「アリー」が今後形にしていくことが、課題

である。

学生にとっては、今回の取り組みを通して、福祉だけでなく、岐阜の伝統工芸についても触れ、地域と福祉の関りについても考えるきっかけになったのではないかな。

5. おわりに

インターンシップの受け入れ先から課題を題してもらい、それに取り組むことがこの授業の大きな狙いの1つである。ただ、今年度で3回目になる一般社団法人サステイナブル・サポートへのインターンシップには、一般の企業へのインターンシップとは大きくことなる点がある。それは「障害」がキーワードになっていることだ。

普段の暮らしの中では、まだ障害者の社会進出が進んでいるとはいえ、町中でそうした人たちに遭遇することもあまりない。おそらく今回この授業を履修した学生の中にも、この授業を通じて障害者の「働く」を初めて考えた者もいただろう。自分では何気なくできてしまう日常動作も、障害者にとっては多くの時間と体力を必要とすることも珍しくない。そうした「他者」の「働く」を通じて、またサポートすることで学生一人一人が自分の近い将来の「働く」はもとより、キャリア形成を考えてほしいという思いが、この授業には込められている。

今回出された課題は商品開発という、非常に難しいものだった。そうした経験をしたことがある学生は私の知る限りではいなかったし、そのような中でも学生一人一人が協力し合い、手探りで少しずつ丁寧に進めていってくれたのは非常に心強かった。今回この授業を通じて感じたこと、疑問に思ったこと、その一つ一つが今後の学生生活に何かしらの形で生きてくることを願ってやまない。

【注】

1. 障害者総合支援法に基づいた福祉サービスを提供する事業所。就労を希望する障害者に対して必要な知識や能力を身につけさせ、当人に合った職場を探すサポートをする。また就労後には職場定着までのアフターケアも行う。
2. 事業内容などについては、就労移行支援事業所ノックス岐阜のホームページを参照されたい。
3. この事業所は、厚生労働省の資料「障害者の就労支援について」（平成27年）によれば「通常の事業所に雇用されることが困難であり、雇用契約に基づく就労が困難である者に対して、就労の機会の提供及び生産活動の機会の提供その他の就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の必要な支援を行う」こと説明される。

【参考文献】

1. 一般社団法人サステイナブル・サポート「ノックス岐阜」 [<https://sus-sup.org/>] (2020年3月20日閲覧確認)。
2. 一般社団法人サステイナブル・サポート「就労継続支援B型事業所アリー」 [<https://alley-ss.com/>] (2020年4月27日閲覧確認)。
3. 厚生労働省「障害者の就労支援について 平成27年7月14日」 (https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000091254.pdf) (2020年4月27日閲覧確認)。

【謝辞】

最後に今回授業を実施する上で多大なご協力いただきました株式会社浅野商店代表取締役社長 浅野有誠様, 株式会社マルト藤沢商店取締役社長 藤澤麗子様にはこの場をかりてお礼申し上げます。